



吉村  
明道  
編輯

近古古事記

7 #5  
3994  
3



月 甲  
第 3994  
3

近世太平記卷之下

尾張 吉村明道編輯

會津御追討の事

年を經し糸のみどきのころさとし詠せしむる  
州の會津に賊徒蜂起して數萬の官軍討手を蒙り東  
北の諸國も數度の戦争に及びしが大の禍に先づころ  
伏見戦争の餘波に徳川慶喜大阪の城を退き吾妻  
路へ落行しときをふりし小笠原壹岐板倉伊賀等  
東北の國小匿れ松平容保が領邑會津に退き藩士等  
六ぞつく兵備を収め騷擾を醸はしり明治元年戊辰の

近世太平記

五月。朝廷會津と御征討ありんと。諸藩討手と命ぜり。北責口を分とせり。尾州。加州。薩州。長州。越前。松代。松本等の兵。越後口より。薩州。長州の別軍。并小大垣。忍の兵。奥州。白川口より。進む。ある小まこと。この時。徳川の脱走兵。并小會津。仙臺。棚倉。中村等の賊兵。白川城。小楯籠りて。屢官軍と干戈を交へ。互小死傷多うり。遂小官兵撃破て。白川の城を乗取り。一時その地を畧せり。その後。賊軍大勢をたつ。押寄せ。官軍。小不利とあり。白川城。賊小棄る。この時。小あり。越後。小水戸の姦黨。市川。三左衛門。朝比奈。

彌太郎等。手兵四百人を率ひ。賊軍。小加はり。越後口の賊勢。まじく熾なり。賊あり。長岡城。小據り。あり。小千倉。小陣せり。官軍。信濃川と隔て。陣と張り。まじ。榎嶺。小打據り。その餘。妙見口。金倉山と扣へて。陣せり。さて。此榎嶺。山路。けり。左。信濃河を臨む。右。金倉山。つたり。長岡城へ。つて。要害の地。りて。この賊兵。この處。小居り。尾州。松代等の兵。逐ひ。この時。小官軍。漸く。小人数。りて。俱小長岡城。小せの入り。賊軍。屈せ。連日の戦ひ。小我軍の死傷。夥しく。その後。賊兵。大勢をたつ。妙見口。榎嶺。と。圍

い。大のとき薩州。長州。尾州。上田の兵。大まきとまげ。く戦  
ひ。一歩の進退とあり。をひらる。賊軍。河東。あり。官軍  
の援路を絶。官軍孤立して。大い。く。如何と  
せん。衆人。色。を。河東。我  
参謀。黒田。了輔。同。く。山縣。狂介。謀。と。設。けて。賊軍。の。背  
を。襲。り。めんと。精兵。を。多。く。隊長。三好。軍。太郎。同。く。堀  
潜。太郎。同。く。竹田。十左衛門。朝。弟。の。霧。小。乗。ト。千。曲。川。と  
う。ち。ま。る。時。小。五。月。雨。の。ふ。り。づ。き。た。ら。折。し。た。れ。バ。河  
水。大。い。く。漲。り。渡。の。舟。殆。んど。つ。ぐ。ら。んと。ま。る。勢。い。な。ま。は。  
人。こ。ま。あ。や。ふ。い。が。漸。く。河。岸。小。の。り。つ。き。枚。を。啣。み。

馬の足爪をつみて。竊小まんで賊營を襲ふ。賊兵事不  
意小出で。大い小驚き。守を棄て散乱せり。官兵こまを逐  
て。賊兵の棄置。大砲數門を分捕。則ちこまを用ひ。追  
遁るを追ふ。大のとき。薩州の兵。及びその餘の官兵。植下  
村より馳せ来り。所々の賊砦を破り。その勢い小乗ト大  
軍。こつと長密ヲ責入り。賊兵防ぎ。こまを知り。城  
中小火を放ち。城主牧野某と俱小間道より枋尾をさし  
て。落行。ま。終。小。長。密。の。城。中。小。官。軍。の。旗。を。ひ。り。た  
ら。せり。此時。仁。和。寺。宮。ハ。會。津。征。討。總。督。の。命。を。蒙。り。西  
園。寺。壬。生。の。兩。家。を。あ。ら。う。越。後。口。小。り。つ。て。諸。軍。を。下。知

せうをたれより漸く小賊砦をやぶつて。會津ふみ入んと  
せし。此頃猶徳川の脱走兵。并小會津米澤長岡等の  
賊兵。東北の國處。小堡砦を築き。日。砲發して。官軍  
のまむを防ぐ。官軍とまむをやぶらんと。七月廿四日諸軍の向  
ふ處を分ち。先づ第一軍。大艦を乗り組。新發田小着  
船を。その餘第一軍第二軍。二日後。小出立まへしと。  
次第を定めて。終り第一軍出帆。後軍の兵士等。明  
日の出立を用意し。か假枕して伏居る。賊軍忍び  
をいれて。審ふたれを知り。夜深更小乗。精兵と  
あつて。急ふり。我。要とまるところの砦を衝き

来り。大小砲を乱發し。我兵を破て。勢ひ長岡城小逼ら  
んと。大のたれ我長岡の城小あり。兵士ども。大の砲声  
をきいて。まむ心せだ。が第一軍。已小賊營小撃入る物  
音。まむなりと。人々眠を貪り。まむ小装ひをなまむり  
ける。忽ち近傍の處より。火煙とらり。砲声いやく急  
小なり。まむ。我軍をめて大ひ小驚き。兵器をおつら。  
防がんとまむの猶豫す。か城をまむ。敗走し。川をわ  
る。乃。夜。あけた。賊兵。遂小長岡の城を復して。城中  
まむ。賊の旗とまむ。さて。大の戦ひ。小長岡の市民。その藩  
主を慕ふ心あま。常小賊軍。小内通し。我軍情悉

く。かれ小きこへりまは。終小賊軍奇功をなして。たふ不及べ  
り。さて日が敗兵一軍ハ榎嶺妙見坂小屯集し。まゝ一  
軍ハ信濃河の西南小相集り。砲臺と河岸小まづき立  
て。賊兵のまゝるをまち居らる。賊兵果して大勢押寄  
せ。こか河をうちまゝりて。勢ひをかへ。熾んをまは。我兵  
頗るうらみ。或一卒のふら。兵ハ虚をうつて。鋭を避  
るを知る。今もはくく三國嶺小兵を引き。敵勢のつら  
をまつて。うらまゝ善うばやと。参謀山縣狂介声残  
あらげ。今日小あら。一步と退け。賊勢とま。一步と  
ま。せ。賊謀と沮まん。何ぞ小敗とおそきて。軍機と失

らんやと。衆人こかの理小服し。ふらび奮てふせき。戦ふ。参  
謀も士卒小言ひまゝりせらる。小ハ。これ近頃の風聞をきく。小  
白川口の我軍ハ連戦利を得て。既小奥羽の地小入り。う  
ら。我熟思も。小ハ。の賊徒も。あらず。後ろをうらみ。久  
しく支あら。とあら。ま。ま。ま。苦戦も。と。暫時の際か  
り。衆兵も。ま。ま。を勉め。と。一軍も。参謀。論小感激  
し。我れ先へ。と。い。ま。去る不。小。賊徒ハ前日の。と。か。小。勝  
不。稍備へ。を怠り。ら。七月廿九日。曉霧小乗。と。物見  
と。出。小。賊營を窺ひ。見。小。賊兵も。用意も。ま。ま。  
窠伏し。ま。官兵も。うら。と。多。く。ハ。刀。剣。を。携。へ。

官軍賊方  
よ内通せ  
者と軍門  
了鳥首也



妙見口より十文字小所てくれ。賊兵走る小暇なくふと  
とまつて防ぎつゝ。其の時官兵の小銃隊銃口を並べ  
とく放て。大い小賊兵と殪。賊兵散乱兵器を捨て敗  
走せり。官軍其の勢い小乗。遂小長密の城を乗取り。  
先づ賊小内通せしものどもをくへて。軍門小さうに。其  
の地。五月以来時々兵火小遭ひぬま。市街多く。茫々  
と荒野とかりて。いとむびり。ありさるなり。

白川口責入りの事

天の時。地の利。小如く。地の利。人の和。小ある。白川  
口の官軍。おひくの。と。ひ。小。士卒の死傷多し。と。一

意勤王の志。脱を去らんとおもふものなり。皆死を極  
て。徳小據り恩と思ふ。嗚呼。おれ和の。所歎。却説白川  
の事情。江戸小聞。朝廷白川口の死傷多きを。御配  
慮あり。急小因州備前大村柳川佐土原笠間等。乃諸  
藩を召し。援兵の儀。仰付り。諸軍乃ち相會。謀を  
合せ。精兵を撰び。白川。進み入。賊軍大勢。白川乃  
城小據て。防ぎ。官軍。新手を引。と。小。賊  
勢大い。小。衰。終。小。城。と。ま。て。烏。夜。小。乗。と。て。落。行。き。り。  
抑。小。の。白。川。の。道。路。極。だ。て。嶮。岨。の。地。多。く。攻。守。と。も。小。要  
害。小。て。兩。軍。苦。戦。し。小。の。一。城。互。ひ。小。客。と。す。り。主。と。あ。つ。て。



あつそひが官軍新士の援兵を得て遂に賊徒を逐ひて  
らひ爰に白川の城を乗取て諸軍をとめそのめてその所の  
人民を鎮撫しつる者も小まき賊徒ども棚倉岩城平の三城  
り指籠りあつそひ白川小押寄る勢ひありつるを官軍手  
早不用意大軍を二つ分ち一軍は畑宿よりまき一軍  
は本道よりまき明治元年戊辰の六月廿四日の曉星とい  
ふいて茨直ち小棚倉城小迫る両軍互ひ小砲撃し  
稍時をうつて遂に城を攻落せり賊の敗兵走て岩城平  
にあつまりその勢ひますます盛なり時小参謀河田佐久間  
等乃ち諸藩の兵を會同して進入の謀畧をさぞ先因州

柳川佐土原備前の兵士は湯本口より進み柳川の別軍  
薩州長州大村の兵士は小名濱口よりまき七月十三日岩  
城平小討入り一戦小屠んとせし賊軍忍びて入きて我  
軍情を知り城外一里餘の地小砲臺を築てふせまらるるを  
因州柳川以下の兵猛威とあつておれを走りに賊徒又  
関門と城外小設け銃口をあつてひびく射撃に柳川  
の兵もんで関門をせり薩州の兵も外郭を抜く時  
は賊軍橋をつて頻りに散せしが柳川の兵百五十余人は  
そが橋桁をもちり突然と賊の右手を撃つ賊辟易  
て本城小ありぞきりまき官軍勝お乗し稲麻の風小そよ

くがごとく。滔々として。本城不せまる。六のと見。兩軍をけり。撃合砲声四面不轟き。天地もくづろくをりたり。が。その日も既ふき。官軍再舉をすべし。兵を引あげ。城外の要地をろびて屯集り。時おその夜三鼓と思がき。ころふ。本城より炎焰起り。終ふ四方不燃へり。一城全く灰燼とをきり。蓋し六れ。前日のよかひふ。賊軍力をつて。ふせぎ。が。彈藥兵糧の竭へき。此城をかくく。ちが。と。や。火を本城不放り。濱街道より。東北さして。ち。ゆきりり。官軍ハ。火炎ふおどろき。馳来て城内と。驗まらふ。賊徒一人も居り。夜半おろ。終ふ火とる。づめて。城内に陣せり。

仙臺藩以下叛き官軍危難の事

うつら松平容保の。會津領邑小退き入り。その臣属等。官軍小抗敵。會津城小。く守て。日よ兵備とおさ。庄内藩と近傍の藩主と謀を合。心ひそ。會津の声援を為んと。獨その間。秋田生駒の二藩素より。王事小力をつく。志確く。庄内とあむ。兵を交へ。が。秋田生駒の兵常不利。ら。既ふ。徳川の脱兵。并ふ仙臺の脱兵等。庄内と共。小秋田の藩内。押寄せ。秋田藩ハ。四面小官

軍の旗飾をくいて前後に賊軍の鼓声高々をどる。未だ官軍の援兵なく進退あま谷りたる。さて六の庄内等の賊兵小加りいふまをりされ一回の議論を生ぜり。そのゆへに最初朝廷より仙臺米澤の二藩より會津征討の勅命あり。また二藩等會津境まで兵をくりよせり。松平容保が臣属等書をいして恭順の次第をのべこの二藩より因て哀訴せしむ。二藩より兵を解て南部丹羽三春以下十藩と白石小會同會津。御征討の義暫時御宥助あらんとして九条家はねがひいでたり。九条家は六の願情を江戸會津征討の督將とちりて奥州におれば六の願情を江戸

に達せんとせしが参謀某傍よりつていひけるは會津藩誠を敬服して罪を謝せられ城并小兵仗を収めてその實効を致しべき。今然らばして遠近の諸城へ兵をくりよせし。官軍小兵を交へる。俄に恭順を陽て。御憐愍を請ふ。そのらる悪む。且書面におのる所をその実を。謝罪の道づくおろすとあはれ。各藩等もまこと之を是なりとせらるや。九条家終小その書をありだけ。又會津出兵の命を下せり。仙臺米澤等の諸藩は皆参謀の論小服せ。過激の徒或は言ふ九条督將事を容るるといふ。参謀はこれを壅蔽はれ参謀。朝廷を挾み私意

を逞きもなりと。激徒等終小参謀世良某を畧殺し。その  
罪状を唱へ南部以下の諸藩を煽動し。由て東北の諸藩も  
なく。會津の黨も。遠近を動かさるる。九条家以下  
下仙臺を去り盛岡小。盛岡藩素より仙臺等の盟  
約小。與のまじ。又微行して秋田小至る。六のと九条家と會津  
征討の督將と為る。秋田小。九条家小。會津  
のまじ。激徒暴横の次第を江戸小奏聞せり。朝廷大ひ  
小おどろかせ。仙臺以下同盟せし諸藩主の罪を告り  
て。官爵を削り。仙臺以下賊徒追討の令を出し。勤  
王の諸藩を徴して。援兵を命ぜらる。さて。此時東北の

國小。輪王寺の宮おと。覺王院徳川脱走兵俱小陸奥  
出羽の間小。終小仙臺小。投。同盟の諸賊勢  
ひ燃火小。風を添。兵と。秋田小  
逼る。の時秋田小滅亡旦夕小。最早城中を潔く  
討死して。勤王の鬼とならん。と意を決せり。漸く大軍  
ち。つ。我援兵の薩州土州佐賀島原平  
戸の兵士を。城中を。再生のおと  
。俱小賊徒を逐ひ。近傍の土地を畧定し。四  
邊の人民を撫育して。秋田の官軍。大ひ小振ふ。て  
九条家以下の面。數日敵地小流離して。艱難何

と譬んくくく。虎の尾と踏。毒蛇の口と適まらる心地  
して。これより大軍となり。俱小敵地小踏入らをやとす。二  
本松三春を討平らげて。日小深入り。仙臺南部米澤  
庄内の賊徒等。容易小屈せん。且このひ且ふせきくろ。官兵  
ま。んで仙臺の駒ヶ峯を乗り取り。これより仙臺城は逼  
らんとす。折う。諸道の官軍も。既小深入りて。この處小會  
合。兵と分て。南部米澤庄内を責んとせ。い。かど。い。か  
く。白川口越後口の賊軍潰散。い。ま。仙臺等の賊徒も。  
頗る。軍門小降。り。多。う。る。

官軍若松城下へ進入の事

却説官軍。雲霞のくく。幾多の軍勢を。つて。仙  
臺以下の諸賊を責め。未。會津小迫らざれば。會津の  
賊徒。諸脱兵と俱。地方の要路と守り。益備へとく  
せり。時小参謀伊地知某。板垣某等。相謀て。い。や。と。れ  
會津の賊。根本。仙臺等の諸賊。枝葉を。今  
根本を殲。とき。枝葉を。つて。枯。と。必定。なり。且  
ま。會津の地。今より一月二月と日と経れば。最早山路雪  
ふ。軍兵と進むと安。い。二。日。い。や。會津の巢  
窟。い。ち。入る。と。兵と二。小。分。ち。一。薩州長州土州  
大垣大村五藩の兵士と率。ひて。會津小赴。一。と。の

餘の諸藩士仙臺以下の諸賊と責む。明治元年戊辰の八月二十日。會津先入の官兵。二本松より方成嶺小向方成嶺ハ會津と二本松の領分境小して。賊軍のところに砲臺をきつき。大砲數門をとちておとありしが。官軍ハれをうつて。一戦し逐ひ走らせ。同トル廿二日。猪苗代の賊營を責の拔りまは。賊軍ろとひて橋を切り落し。往來を留めてふせぎしが。官軍假橋を作て渡り越へ。滝澤嶺小すみ。同トル廿三日會津若松城下より入り。賊徒大ハ驚き。ミを城内より引退せ。櫓のとちをいすのり。きてより。賊軍の手配ハ。猪苗代口ハ谷より山高

ふして。道路艱難をまは。官兵容易に來るまじと。僅數十人の兵をそそぐ。たゞ庄内藤原三斗小屋の口くのまカをつと。りる。えらばも官兵ハ。の虚小乗ト。難を城下より入り。賊軍大ハは膽を落し。りる。さる。かどり猪苗代より入り。官兵。まんく。ま。城樓を的。大砲を連發し。一手りて若松城を屠らんと。うち合ひ。時は賊徒の四方は散りて。ふせぎまより。者ども。大をまをきくより。ハを我本城小變起り。と。各所分の守備と。して。急は城内に駈集る。同トル廿五日詰旦未明。賊徒城をいで。大軍一度よせせま。我兵ハを支へ。り。一軍

終よみどまんとせしむ。參謀大聲して全隊開けと令し  
けき。我兵を分つて各所を散らし。賊徒はこま  
を長く逐ひ来らば。我兵除くは兵を収め。後す。賊  
徒。我兵を襲ひ。勢ひをなげ。盛んなり。が參謀俄に奇  
計をのぐ。前後より賊徒をさしをきみ。責立りきば。  
賊徒大ひよろこみ。城内はあつらうんと。我兵をさし  
氣を得て。まなくきみ。責戦ふより。賊兵の死傷夥し  
かり。ある所。六の日尾州紀州肥前。その余の官兵。白川  
口を破り。藝州長州宇都宮大田原。その余の官兵。藤  
原口をさし。か若松城邊は到着し。官軍の勢ひ

大ひは振ふ。その夜も既し小夜更て。四野沈みとなり。か  
賊軍兵を潜りて。我軍營を襲ふ。は兵大ひは驚き。物  
具をつて防ぎ。黎明よりつて皆城中へ引き。さ  
どき。

會津降伏の事

みちのくれ。會津はろく。伊達上杉等の名将。前後し  
ち據し。要害の地なれども。永く六の地を保つとあはれ。  
それ徳は在る。嶺はろく。魏の兵起。いひ。八理り。さし。  
却説。越後口の官軍。會津若松の城を陥んと。會津川  
をへ。對陣し。六の時賊軍。八里余。相連ぬ。

守備を不けん厳重なり。官軍漸く一角を討破てと不  
ひくど。賊兵銃丸をついてふせぎりまき。容易よま  
いづく。そのとき若松城下は先入せし官軍賊營の背  
より。賊軍のまをとりちとりのんとせしが。越後口の官軍。  
その靈を乗とて頻りにまきみうちまきむ。賊兵前後り  
敵をうけ謀の出来べきやうなく。大ひよろろし。官軍ハ破  
竹のいまをひよ。まなく進んで攻立りまき。終にたまに城内  
を引退く。官軍ハおのきまきけんて追ひす。み若松城  
下り逼り。是明治元年戊辰の九月十日なり。さて官  
軍ハ諸道の兵と合集し。相謀り石榴弾を城屏り連

撃をまきハ樓櫓并に本城は中り瓦石四方は破裂して賊  
兵多く死し一城の鳴動恰も轟雷のごとく殆んど破滅せ  
んとせり折柄城兵を伐り餘暇のあるをりのまんが。紙  
鷲を城上り放て戲を愕くむやうとなつたり。時官  
軍城の西方より逼り銃丸を飛せまき。城兵もこきり  
應じ大ひよ我兵を登り参謀伊地知某山縣某板垣某  
等士卒は云ひけるハ斯る險阻の地は深入して徒ら久し  
く日に移さば禍ひあるひハ蕭牆のうちより起らん。そ  
こより勢をそろへ凌ひて城のなり。勝敗の一を決せり  
り志ありと。各向ふとを定め。時は米澤の賊徒既



は降伏せしむるのむい米澤の兵士は先鋒を命じ前罪の一端を贖はしむ米澤兵六をを畏れ先鋒は進んで撃戦ふ城中今ハ声援をうけしむ殊は官兵のこの境は入るこ賊兵の意外に出来バ城内の守備修むるよとまなぐ火薬兵粮次第よつきまて一城の力おとろへけるを九月十九日ハ松平容保の臣秋月悌次郎手代木某の二人相謀て使者を米澤藩の陣所へ送り一藩のつとを謝し哀を乞ひゆるが米澤藩忌憚りて使者をうけ先委細をそへて土州藩の陣中へ送る土州藩ハこれあつひハ彼まが謀計あるんとよくその者を糺せし全

くつらりと見へどまは参謀等彼の使者を召寄せ降伏謝罪の情願を取あげ更ハ令りしハ松平容保が父子を軍門へいざし降伏しせし城邑をむび兵器を悉く獻じて謝罪の實効をあらはし云々と日を期し使者を還せし城中より降参と書し櫛三本を城の大手門は立て家老ハ各麻上下を著し謹て降伏の旨を達し續て松平容保父子城門よりすみそつとんで歎願の一書をさしとる官軍五十余人乃兵士をりつゝ容保父子等を警固し滝津村なる明國寺へ引去りし。

榎本鎌次郎初脱走の事

明治元年戊辰の夏。朝廷より舊幕府の軍艦御引あげの義を仰出されしが、徳川の臣榎本鎌次郎の哀訴より。朝廷更ニ富士山丸以下の四艘を收めし。開陽丸以下の數艘を徳川家へ下賜しぬ。其の鎌次郎ハ、小ヤサキの豪傑なり。加ふる航海の術は達し。率る部下の者等も、その術を委しけむ。徳川家ハ、おいて著名の一隊なりしが、あは至て鎌次郎開陽丸以下の數艘をとりて、江戸を脱せんとす。開陽丸ハ大砲廿六門を架し、蒸氣のカ四百馬を兼し。本部第一の軍艦を

まば、徳川の臣屬ども、其を恃む。常ニ主家の恭順をよろこぶをまば、別り成はんとあはんとす。又脱走せし三兵隊等も、江戸を去るとき、潜し鎌次郎と謀を合せ、好き機會をみ共相援んと約定し。其の同年の秋奥羽の諸藩同盟して蜂起すると聞き、鎌次郎并小松平太郎荒井郁之助の輩、永井玄蕃等と謀て、言は、我輩ハの堅艦を率ひ、海中は横行して陸軍を相援け、天下誰より敵をりあんと名を鎮撫よとせ。書を朝廷に奉りて、開陽回天蟠龍神速長鯨大江鳳凰の七艘を率ひ、品川海をわたり見て、浪を去のぎ。

夜の中は出帆あり。去る不どは徳川の臣属等。まづ去きを  
知り。急ぎ別船を飛して追懸。が底とみれば失せをて  
ぬれ。別船もいせせん。つとを引還して。そのよりを  
朝廷に申上げ奉り。朝廷鎌次郎があをむき謀  
し。とハゆた。知るな。開陽丸以下の數艘。全く惠恩  
をりつ。下賜ひ。恩は馴る。養犬却て害を為れ  
と。大ひは逆鱗あせす。鎌次郎を海賊と。御追  
討ありんと天下に告げ。まのよりを外國公使おま。り。  
應接を禁ざられ。り。

榎本鎌次郎函館より戦端を開く事

さて榎本鎌次郎等。海軍を。奥羽の諸賊。り  
應援。大ひは成中とありんと品川海と脱して海路仙  
臺より。奥羽の形勢を窺ひ。が既。機會。後  
奥羽の北八藩。降伏。會津若松の城。落威  
せ。跡を。衆人殆んど謀計。み。が。又豫  
て脱走。徳川の臣大鳥圭介等。奥羽の間。事。を  
為さんと。會津等の應援を。が。松平容保降参  
の幟を立てる。至。今。圭介等。唇亡び。齒をむく。此  
一黨。と。會津邊を落。身を隠さんと。折。  
榎本鎌次郎等来ると聞き。急。鎌次郎等。方。

投トク。去る不とま圭介等。鎌次郎等と會同。相謀  
て函館より據んと共、仙臺を立去り。直ち、就鷲木港  
より著船。其の就鷲木港、函館を距ると十里餘あり。其の  
とき、函館の知府事清水谷侍從、龜田某、五稜郭より  
て大ひよおどろき、五稜郭をひらむて、津輕青森より引  
て来り。判事堀真五郎を東京より遣り。危急をつゞ  
援兵をとひける。賊兵、就鷲木より上り、兵を分て二軍と  
し、一々大鳥圭介を將として、函館をむらひ。一々嶺下  
は向ふ。其の時、我軍、佐竹津、輕松前、大野、小倉、福山の  
諸藩士等、内地の境界をまもる。其の賊來ると

まき。先づ大野村に迎へ。さうして賊軍の一方を打ち破  
る。大鳥圭介、其をまきより。新に兵を伍に組立て。破  
竹の勢ひをひき、押寄せ。我軍、こまきとむつて、大ひ  
よに敗走す。賊の隊長土方歳三と云ふもの、別小兵を率  
ひて、就鷲木港より川吸嶺を打踰へ。間道より函館ま  
せ、せきより。兵を分て、近傍の土地を畧取。終に大野  
村、文月村等、いそを彼より有とす。然るに、我軍、福山、落  
の兵士等、大ひよ之を怒り。七重村より、んで戦ひ。其の  
賊軍次第、跡を續て、兵を繰出し。我兵、賊將の大  
岳某、誣訪部某の二人を殪し。其を。終に敗れて、四

方は散ト。賊軍多くぞみ来。五稜郭を乗取。賊軍の金鼓四方はひき。我軍次第は跡引。兵勢大に。おとろへ。多く兵士を失へど。猶應援のをもたぬ。バ。殆んど謀計よろし。みくる。賊軍鷲木港あり。脱走艦の田天丸。蟠龍丸の二艘。急り船調へて難。函館より上りくる。たのとき。函館は知府事等。青森よりあつぎ。一騎の官兵。賊兵を拾ふ。心やんげ。上陸。繼て開陽丸等の數艘。皆函館より上りくる。賊軍一同。このころは集り衆議のり多。永井玄蕃を仮りの函館奉行とす。

その事務を取計。賊の海軍。蟠龍丸。白津洋より松前。責来。松前の藩士。砲臺を各處。きづり。守備を嚴重。このころ。蟠龍丸と一戦。砕んとす。得。蟠龍丸来。松前の灣中。縦横。石擗弾を放。一の砲臺を撃。毀。續て弾丸をけ。我軍力をつ。水陸互。一歩の進退を争ひ。終は蟠龍丸。松前よりおづくを得。して。一たび。其後。賊兵謀を設。海軍陸軍と二手。海軍は福島灣より砲撃。陸軍は福島村より。野越より押寄。松前藩この



函館に在る  
より英佛の  
船将等  
榎本鎮  
次郎  
接せ

時堅固は城を守り。賊軍そののちうづくことを得ず。松前の藩主江刺より隊長安田拙造等松前より奮戦し上を下へと争ひ。安田拙造は小やう。いこのの賊勢も。我軍容易よまざるべう。は。我藩主の江刺あり。他邦より移るををやと。大の論を起し。直とも。藩士鈴木織太郎田寄東等。この論をよぬ。直ち江刺より安田拙造と争論のう。安田父子が因循といふ。終は安田父子を殺害し。藩内をば。藩内をば。為は動揺収らね。却て防戦の力。み。賊兵は。内乱あるを機会と。直は城内に乱入。城兵大は。よ。獨り田

村量吉踏みと。一騎當千の。多々賊兵を斫殪と。寡は衆に敵は。終は賊兵の。め。首を授く。その余の城兵。追。散乱。あ。その勢ひ。乗。江刺を併。海軍陸軍謀を合せ。本道或は五稜郭より間道をぬ。江刺は。この時榎本鎌次郎。開陽丸は。乗。松前灣を。錨を江刺の岸邊に停。松前藩主等。先。の。藩士七十人を率ひて。津輕。か。鎌次郎等江刺は。既。我物。と。猶。陸

軍の来るを候居りしが折しその夜風波をなほし  
し久殆んど纜を絶んとする勢ひは鎌次郎等おどろ  
き海濱の暗礁を避んぐる。遙に洋心よりとや  
が蒸氣の力、よく倍して取りあつふらうし、忽ち開  
陽丸暗礁に觸れ、ゆきやうに、あがきやうに。衆はな色をう  
しそひる。時は函館あり、賊兵にまをさし、回天丸  
神速丸の二艘を飛して救ひ来り、あまをども。風勢をを  
止むれば、あつらふ近づくこと得ば、さうとて、まを見流ハロ  
惜しとす。ひの二艘氣をいせ、如何ともさうやうをう  
ら。かゝて鎌次郎等開陽丸よりむと四日あすり、

て。漸く風波も収り、あまをども。さな兵器を携へ、ちのて陸ま  
上り、その後十日あすりを經て、一船全々破滅し。鎌次  
郎等暗夜に燭をうし、そよぶごとく、あきれ果て、さうりふ  
に。さうらふ、のとき、他の賊將土方歳三等、兵數百人をを  
きひて、官兵の小砂子并に稻倉石の関を守り、を目け  
うち破らんと勢ひ、鯨波のまは、責寄る。官軍大ひ  
は崩れ、さうらふ、賊勝に乗じて、小砂子の險をうち  
こへ江刺より、が、間道よりの賊兵と関を切抜  
直に函館の砦に迫る。そのとき官軍大小砲を乱發し  
て防ぎ、さうらふ。賊軍は山險を踰へ来り、さうらふ。大砲の用



意をぞん。たゞ小銃のこを撃てれば。官軍勝利をらん  
とぞ。忽ち賊兵二人をせきこりて。直に我門扉の下を潜  
り入り。門扉を破りひり。賊軍をうちまはさる。全軍得  
と一度は打入り。官軍こまがと先は隊伍乱を。彼我の別  
をうしそへり。その中は三上長順。左手は板を扣へ。右手  
刀を揮ひ。賊將伊奈誠一郎を撃つ。直に誠一郎を  
斬り。賊將横田某是をみる。短銃を提て馳来り。  
三上長順目をつけて撃てんとぞ。三上と馳つて横田  
を斬る。賊兵の二人も三上とぞ。一太刀を  
と肩を撃て。三上六の重傷とつと前は伏り。六のとき

前後乱戦とぞ。我軍頗る兵士をうしそひ。殆んど兵  
勢おとろへり。賊軍も勢ひ熾ん。頻に本道  
よりぞみ来り。外は賊の一隊も来り合せ。全軍益  
進み。官軍遂は敗れて四方は走る。賊軍ぞみ来り  
熊石をうしひが。一人の官兵をければ。五稜郭は引  
還り。砲臺も各空砲を連撃。勝利の慶を祝。却  
却説榎本鎌次郎。函館は在。各國領事官及び  
英吉利仏蘭西の船將等を引見。我等この度港内  
の裁判を致さんと申遣せ。英仏の船將等大は榎  
本鎌次郎等と心を寄せ。懇言ひ。我輩は

より日本政府  
両軍の兵を  
よつき。鎌次郎  
厚意うけ  
べく計ひたへ  
を擁し。蝦夷  
願を書面よわ  
る。朝廷よ  
騷擾ぞと明  
評議ありし

せむひ。海賊御  
賊兵等相謀  
て投票し。榎  
と。荒井郁  
行と。五稜郎  
奉行を置き  
ひ。モコランの  
函館  
明治二年己巳  
府の兵士。并み

涙を押ぬぐひていひけるは。さうく。貴殿等が  
ぞ。さう。此度の一事更も任せ申さん。然る  
。鎌次郎が心底を述べ。徳川家血統の者  
心を開拓して北門の管鑰を掌らんと。情  
。彼の外國人等をして。朝廷よ奉  
先頃品川海を脱せし賊徒。函館地方に  
。大軍を擧て御退治あらんと  
。鎌次郎等が上表を御覽ありて。益怒ら

追討の旨仰出されるときは。函館に  
。假しその首長を定を置んと。一同相集  
。鎌次郎を總裁とし。松平太郎を副總裁  
。助を海軍奉行とし。大鳥圭介を陸軍奉  
。本營とさたえ。函館松前江刺  
。武澤某を開拓奉行とす。人数二百を率  
。各事を計ひける。

追討の事

三月。函館の賊徒を御退治あらんと。函館  
。薩州。細川。長州。備前。水戸。藤堂。又。苗米。

は至り。貴殿等がと見え。辞を陳べ。終は

福山弘前松前徳山大野黒石等の諸藩士は討手を  
仰付られ日を期して函館に向ふその兵凡そ六千五百余  
人すく海軍一八品川四方一土方堅吉吉塚源六中牟田  
倉之助岡啓三郎石川貞之丞山縣久太郎等も甲鐵  
丸朝陽丸春日丸等以下の七艘を率ひて先手は進みま  
づ南部宮古港に達し彼れの様子をうかがひしる函館の  
賊徒大をを聞よりまじく兵備を嚴にして賊將荒井郁  
之助等回天丸蟠龍丸高尾丸の三艘を率ひ風波を凌ひ  
て函館を襲せかくて三月二十三日曉烟分んとして帆檣を  
るか東北のみえ亞米利加國の旗印を翻せり我諸軍

ハ外國の船をればとていとも用意を為さざりしが彼軍艦  
漸く我兵より近づくる忽ち旗印をむきく大砲を發  
し直り我甲鐵丸を目がけてをみきしる我軍艦はよ  
しりその脱走の回天丸なることを知り急は蒸氣は  
火を點せをせども俄に運轉砲發せらるる至らざる賊兵  
大塚某野村某等その隙に乗じ白刃を切り交す  
おどつて甲鐵丸は撃て入る官兵は品川土方脇等各  
短鎗をふるひ大札と合せて頻りに戦ふ賊の船將甲賀源  
吾回天丸の甲板梁より倚り急は下知して五十斤砲  
を放しむれば甲鐵丸の甲板は中り官兵大札がとえり

傷をうくるもの夥し。ある所は我諸軍艦漸く備具して  
てきみ出で。弾丸雨のごとくふりちりぬれども。甲賀源吾  
は回天丸を縦横に運轉して。是は應に時は官軍の小銃を  
善まらざるあり。賊の船將甲賀源吾を狙らひ撃んと。一發  
し源吾が左の股を撃抜き。まゝ一發は右の腕をうちぬけ  
ど。源吾はたまは屈まらざる。味方は其の傷を隠  
し。志が間ハ士卒をア知して。さうせらるが。源吾は追  
數ヶ所の傷は。身体つゝのまをて。その場へどつと墮れられ  
ば。士卒等たまをみく大ひはおどろき。是より回天丸ハ艦先  
をとめて。あつがきつる。我軍たまを追討んといふげども。底

し。みへは波よかき。只磯浦の朝わき。耳子のこまき計  
目なり。さて又賊船の幡龍丸高尾丸。回天丸と俱し  
函館よりまじく進んで来り。わだの二艘風波に沮  
す。洋中は漂ひ進退自由なし。殊は高尾丸ハ蒸氣の  
機関を破損し。宮古港の近傍におちて。如何ともせん。こ  
そ。終は賊の船將古川某等とぞ。死して。七十余人  
高尾丸は火をうら。各南部は上陸し。森岡藩は降伏を  
す。夫といふ。は我軍艦の回天丸を追ふもの。其の高尾丸の  
洋心にあつをみて。寄近えんとせり。が艦中燄と燃へ上り  
賊兵の一人を名れば。皆怖し。て拵去り。さうせらる不とり

官軍。六をく。函館を免れんと。急用意をなす。が賊軍は、田九幡龍九千代田丸の三艘を浮久。函館の近海を巡警。ま。陸上は兵を分りて。五稜郭函館松前江刺福島モロラン等の地方を嚴重に守り、よりの。時。我長陽丸以下。奥州羽州の邊より。諸軍艦と俱に津輕青森を發して。四月九日江刺の近海を過ぎ。賊軍はあがつき。陸軍の一手をよりて部邑に上り。直に上崖山の要害を打據り。賊の陸兵等。軍上陸を聞き。大兵を率ひて撃て来る。我兵高きよと伏し撃ち。諸海軍より。横より烈しく賊軍をうつ

賊軍一戦は敗れて引退き。土場川を隔て。踏止りが。諸海軍轉じて江刺を責入る。賊兵大ひはなどろき。松前城を走り。於て官兵江刺を乗取。同土日は松前城を免れんと。兵を分て二軍とす。第一軍は江刺より進。第二軍は鷯邑より進む。時。賊兵江刺を復せんと。大ひは呼はりすみ来り。官兵は。撃つ。官軍殪るもの數を多し。大小砲を棄て引退。ま。の時。木古内并は二股に別軍。大ひ。賊軍をうつ。同日。十三日。官軍曉の霧をきり

乗一軍沈然と枚を啣。再び木古内二股の賊巢を  
襲ひり。賊軍深林幽谷に兵を伏せ。官軍のすむとま  
ちりけ。左右翼よりみぞれ射る。官兵大ひらる。み終  
ま。敗走きり。大のとき仙臺の脱走兵五百人あり。賊  
軍入交り。賊軍人数を得。大ひらる。松前城の賊將  
等々木古内二股の勝利をき。挙て江刺よとまらんと。  
同日十六日の横谷清部邑よまき。我軍春日丸  
海濱に寄り。寄りらわづき。陸軍横手より大れをすけ。  
終り。おつて賊の數十人を斃せ。残兵を松前よりど  
走り。官兵続て同日十七日の曉水陸軍松前よ

攻入り。賊の巢窟を撃碎んとせ。賊兵本道折戸の  
臺場は據りてふせき。戦ひ。官兵すむとを得  
たり。が。別は兵士と山道より向せ。賊を撃つ賊兵  
ら。終り。走る。官軍折戸の後口よ出。本道の官兵  
と挾撃つ。大のとき諸艦已に松前よ責入り。城内并  
は臺場市街を大ひら。賊兵終り。弾丸竭き十二  
斤弾を十八斤砲を装ひ。防ぎ。が。十二斤弾も竭  
果て。苦。官軍は水陸すむ。すみ。その日已り  
く。賊守る。耐へ。松前を走る。官兵逐て松  
前を取還。盛は官軍の旗印を。が。松

前より一賊兵を走り退ひて福島尻打木古内とくく  
守らんと。大に備へて修めり。同く十九日の曉我兵木古  
内の賊營を大霧の中より撃てかり。賊大におどろき  
乱る。官軍大に乘りて賊を追ふとき尻打は在りし賊  
兵木古内敗るとき。我後ろより廻り侵入る。我兵顧み  
しうひしが賊の敗兵再び勢ひを生じ還り撃つ。この時  
官兵殆んど前後の敵又つの一軍を敗走し。木古内  
は終に奪ひ取り。同く廿五日既日三竿に及ぶ。官軍  
別は二股口をとえし。賊若く守り聊ゆるまじ。兵を  
引替きしうたり。小發砲のく急遠近まよる。群動

のいさ。山林のみち互に勇をみつて戦ひしがその日既  
夕陽のく低くなりぬきど。猶雉雄に決せざる。兩  
軍兵を解て分ちり。同く二十四日ハ曉を薄く  
きころ。甲鐵丸春日丸長陽丸陽春丸丁卯丸函館港  
すみしが賊兵回天丸蟠龍丸千代田丸の三艘を運りし。  
大に應じ互に十丁若くは五十丁をへて砲發し。海  
水に大に溢れんとする。その日午下り  
は賊軍終に勢ひあがり。我軍は天基塲を  
援けし。と。基塲の距離を測量し。倭りたるがひ  
とつら。港心より。我兵を誘ひり。諸艦ハ咄嗟と大に

を追ひ詰のーが。臺場の弾丸乍ち我軍は打注ぎ。殊り  
朝陽丸の甲板梁と砲臺を碎き。終に船を損害  
一々をど。我兵大を屈せしむ。み逼んとす。が。臺場の  
砲勢まじくをげ。且我軍ハ水理は委ト一うぎをば。  
深く入ることを得。やみく兵をぞ開き。六の日二股  
の陸戦ハ勝敗互は決とされ。賊軍の一銃殆んど千發は  
及下銃砲熱して握るをば。冷水を桶は汲み貯へ。且浸  
一且放つ。明日賊兵數百を踰へ衝き来れば。官軍  
まづぎ。あさひは五十歩して止り。あさひは百歩して止る。  
監軍駒井正五郎高きより。いさと望見。大ひは

怒り。あさひは數十人と馳せ下り。賊の中軍へ入る。す  
は於て前きの兵士と還り討ち。大ひは振る賊を逐ふ。賊  
兵退き。兵を分て處この砦を守り。六の日の兩軍の  
間ハ四百余人の死傷あり。監軍駒井と遂に戦中  
討死。同日二十九日平明。官軍の海陸あり。び  
まみ。矢不來と責拔んとす。賊軍ハ大鳥圭介兵  
五百人を率ひてふさぎた。官軍賊の左手を撃ん  
と。路傍の巖山は攀ぢのり。んとす。賊兵豫  
ト死壁を山腹にまづき。官軍を覗り。乱注す。いさか  
さ。死傷もの多。別路の兵もあま。いさか。



官兵を伐も奮激し。猛威をふるって賊軍をやぶ。時は我軍甲鐵以下の五艘も岸の邊は寄り近づき。賊軍の横手をとるもあつ。殊は甲鐵の百斤弾は連りは基場をうち。賊軍の大砲をうちくまき。官兵大は威を輝く。賊兵崩れて守を捨て走りける。五月二日。ハコ兵七重濱よりすみ。大野邑といふ邊より。賊兵夜に乗。七重濱の陣營を侵入す。我兵おどろき。闇夜彼我の別れをうしむ。多く兵士をうしむ。同日。四日の曉。我海軍も函館港にすみ。が。四天九蟠龍丸。千代田丸の三艘むら来り。基場とも。頻りに我海軍と

狙うに撃つ。官兵もあつ。と。猛威をふるって。たふよど。海上は。まが。を。震動をり。ま。く。の。春。日。丸の弾丸蟠龍の蒸氣罐はあり。甲鐵丸の弾丸基場の數十人と打殮は。を。り。賊勢頓に衰へ。猶夕陽をあり。了。あ。が。き。り。は。は。諸海軍も。ま。追ひた。か。つ。ど。一。先。づ。軍を扣へる。同日。五日の破曉は。甲鐵丸以下分つて。函館の近海は。り。が。賊の海軍すみきり。甲鐵丸長陽丸の二艘をのり。ま。き。り。二艘は。む。ら。し。賊船をうち。が。賊船徐く。近づき来り。甲鐵丸。つ。き。あ。つ。時。は。甲鐵丸。官古港の變を慮り。を。を。避。ん。が。る。ん。長陽丸をい

だして横より砲撃を免るるが賊船をとも應ぐ物お  
たやかり二艘の間を過ぎ去るるぞ。二艘は中み寄近  
ひて内をみまど一人の賊兵を。機関もくく破壊せり。  
時は賊兵は遙く去るをみる。死も孔明生る仲達を走  
らすと。大音の如く呼りける。は則ち千代田丸なり。前  
夜賊兵あまらつて辨天近傍の暗礁に觸れ船将森本  
某もその狼狽してその短船を上陸せり。その日潮  
のみつるよ由り空船をばきて漂ふなり。同日く七日  
に我海軍有川の近傍を抜く。函館港内はすみ。賊  
兵いよいよ蟠龍丸の俄に運轉せると叶はざるをばらさ

を基場の傍に居て砲臺とす。同日天丸を放てり  
兵をふせく。我甲鐵丸は三百斤弾を回天丸に放ち  
が。賊の數十人乍ら燈を殊に蒸氣機関の器にキセン  
テレツキをうちき。回天丸は運轉せると叶  
せん。せんを回天丸を浅洲に上げ浮臺とせん。時は  
賊の弾丸春日丸の艦にあたり。官兵殲るの少くす。  
既して海軍はなむる。同日く八日。は陸兵七  
重村あり。び大川邑に屯せり。その夜賊の一軍古屋  
某と長とす。兵三百人五稜郭を出で。大川邑に  
發せり。折りに大風雨あり。官軍備へをゆるく臥し

居りしが忽ち軍營を襲ひしをば。我兵おろき起つた  
ろんときまきど。營外うろくして咫尺を合ふ。あつひは  
味方を害し。あつひは敵を見遁し。進退不便して。大ひは  
兵士とろし。すひし。す。賊の一軍は。大川某を長し。  
兵數百人を率ひ。七重村をのり。風雨は乗し。火を陣  
營に放て押寄し。兵殆んどろし。み。終つて。まき  
ろし。す。同日く九日。大鳥圭介兵八百を率ひ。七  
七重村に來れ。官兵豫し。大川赤川の近傍に兵を伏  
せ。賊兵のすしをろし。一度はとつと群り起り。大ひは賊  
兵を殲し。す。す。のとき。我海陸兵。大ひは。奉て函館

す。先入。春日丸陽春丸の二艘函館の背より別り  
萬年丸す。び。小舟をろし。陸兵を寒川村にす。伏  
を勢を山中にす。甲鉄丸長陽丸丁卯丸の三艘。函館  
の前面に逼り。賊軍は。蟠龍丸の修理を加へ。回天丸  
す。び。諸臺場と共に應し。時。山中の伏兵。す。陸  
の賊兵を突き。す。す。を走ら。春日丸。す。前面  
り。す。み。甲鉄丸以下諸軍と。連り。臺場。す。び。蟠龍  
丸。す。す。り。殆んど。蟠龍丸を取圍む。賊の船將松岡盤  
吉。驍勇。す。す。す。をふ。船の進退。す。す。つ。ふ  
す。す。砲手。す。す。す。す。銃を。す。す。す。す。



近世大平言  
卷之十

三



官兵急  
賊艦と撃  
砕んと

近世大平言  
卷之十

榴弾長陽丸の硝庫はあつた。乍ら黒煙ふきあがりその  
一と十里余外はふき。遂に海底に沈れり。賊兵の姿を見  
手をうつらふる。我海軍は長陽丸の傷を溺る者  
をまゐりて賊の陸兵勢を得て還りたり。官兵終に  
中をまゐり各七重濱よりとありなき。時は賊軍の蟠龍丸は  
横手より七重濱に撃来り甲鐵丸春日丸の兩艦は姿を  
見て直に蟠龍丸はあり。殆んど蟠龍丸を砕んとせり。勢ひ  
よぞ辟易して引退き。臺場の下より。そを一人一所の大  
砲を水に投げ。蒸氣機関とよりより。火を回天蟠龍の  
二艘に放し上陸せり。ふちより賊兵軍艦一艘をとりけ

る。そのとき我陸兵もくすみ。賊兵土方歳三以下の  
數十人を撃殺せり。賊軍勢ひ次第におとろへ。残兵は五  
稜郭をひひ千代岡。辨天臺はありき。官軍は  
よ至し函館を回復せり。同トく十三日。我兵永井某  
とよとの自り。辨天臺場は往き。賊兵を諭して順逆  
の次第を陳べり。賊終に降伏せんと議し。あつひ  
と異論を唱へ。我屈伏せざる。論終らざり。一  
か。永井も。榎本鎌次郎をみ。順逆利害を論トク。あ  
鎌次郎頗る事とささるといへ。部下の議論を不かり  
依違して。永井も厚意を謝せり。同トく十六日

官軍別の使者と千代岡より遣り、賊兵と諭す。賊兵應を却て使者と凌辱し、官軍大いに兵を分ち三とす。七重濱桔梗野よりをみつ、隊長来嶋頼三衆を率ひ直に千代岡に責入りが、うちきく、弾丸右の股にあたる。来嶋は、をくみみ、サシく衆をとる。其等、あつひ、関と排し、あつひ、壕とく、踰へ、い、み入る。賊将中島三郎助、倔強して二男子恒太郎房次郎并に柴田某朝夷奈某近藤某等を率ひ、堤上より、をくみ、あつひ、樽澤身とむる。之、中島よりあつひ、七と

び合せ七たび離れ、身十余ヶ所の創をうり、流血淋漓として地をくげ、猶勇をあつひ、遂に中島を殲し、已に、あつひ、壇をくみ、あつひ、官兵別の中島の二子及び柴田以下を撃殺し、遂に賊營を乗取り、をくみ、あつひ、爰に榎本鎌次郎、曾て阿蘭陀の学ぶ所の萬國海律全書二巻、烏有に歸るを惜みて、寄せ贈りしが、同トく十七日、田島敬藏榎本鎌次郎、松平太郎、荒川郁之助、大島圭介の者より、軍門に出、降伏し、相續し、永井玄蕃、松岡磐吉、相馬主計等、終に降伏し、をくみ、官軍相謀り、皆内地へを護送し、

王室隆盛の事

畏く我々今上天皇先帝の御志を継ぎ維新の大業を振起し。希世の大功を立たり。そしつて天皇の御時ありて。草野は尊王の道まじくむけ。天皇はつらつら勤王の師を率ひて。関東の賊徒を御退治あり。却て魁首徳川慶喜が恭順謝罪の實効を正し。慈仁の詔を下さりて。その罪をゆるし。良將忠士を命じて。奥陸函館の巢窟を抜き。諸賊を誅戮して。東地の州郡を鎮撫し。海内の兇賊を順に歸せざるものなり。實は御武威の盛なりと。風の草はかるがごとし。そ

の際江戸は行幸す。終つたの地を東京と改稱し。廟議の定むるところ。萬機の出る所となりぬ。明治二年己巳の春。島津毛利鍋島細川等の四藩封土の私に有らば。つらつらと恐懼し。たゞぐるこまを還し奉らんとねがひ出りき。天皇を依りて。億兆の庶民を詢ひ。まじつちよゆ。その時ありて。大政事なる神武創業の古制を復し。官使寮省より鎮臺府縣を設け。万機百司の怠りなく。神を敬し。民を惠み。外蕃各種の来舶を禁ざりて。貿易交際乃みちを免さるれば。諸港の帆檣麻のいとく。往来す。

物産織ウツクは繁昌はんしょうして。明德光威めいとくこういの隆たかんする。と。  
四方のしりくすやぐりやきりる。又明治五年壬申の  
九月。琉球りゅうきゅうの國王尚泰しやうたい使しひを奉ほうりて入貢にっくわん。我  
皇德くわうとくを仰あやまぎりきま。朝廷てうていとさうし尚泰しやうたいを藩王はんわう  
とす。華族くわしやくは列れつ。邸ていを東京の内うちに賜たまふ。賜たまふ。  
のとき。三條實美さんじょうじつみ太政大臣たいていだいじんとす。岩倉具視いわくらぐし右  
大臣だいじんとす。参議さんぎ以下の百官ひやくくわん各おのその人を得える。四海風  
そのどんでんらん。萬民ばんみん徳とくは化くわして。上かみは  
延喜えんぎ天曆てんりきの治ちり。下しもは雲苜うんもくの訴うへ。諫鼓擊けんこくげき  
の刑鞭けいべんをりて。松吹しょうふきくうを萬歳ばんざいを呼よび鹽燒しんやう

浦うらの煙けむりまど。賑合にぎあふ民たみの竈かまどとす。誠まことは皇業くわうごふの隆たか。  
盛さかる。と。天祖てんその神靈かみたまも鑒あやみなるん。

近世太平記卷之下終



# 吉村明道編輯

明治六年十月官

許

明治七年十月發

免

明治八年十二月版權免許

# 片野氏藏版

## 東壁堂藏版發賣書房

和州奈良	高橋千三	江州大津	澤宗台郎
城州伏見	前田半兵衛	同	古川伊助
駿州靜岡	浪花屋市藏	同 高京	近江屋太兵衛
同 沼津	須原屋善藏	勢州山田	山崎與兵衛
遠州濱松	木屋浦吉	同	藤原長平
同	伊勢屋太右衛門	同 松阪	柏屋兵助
同	伊勢屋權平	同	木屋嘉助
同	伊勢屋清七	同 津	山形屋傳右衛門
信州諏訪	白木屋健次郎	同	篠田伊十郎
同 木下	藤屋磯右衛門	同	丁子屋清七
同 飯田	萬屋久五郎	同	本屋佐兵衛
同	十一屋半四郎	同 郡田	服部利三郎
同	紙屋庄兵衛	同 四日市	吉田屋善太郎
同	若木屋利助	同 來名	森傳四郎
同	松尾屋新右衛門	同 紀州和歌山	坂本屋喜一郎

加州金澤	同	中村屋喜兵衛	越前武生	千秋與	八
飛州高山	同	近田太	平同	二文字屋安兵衛	助
三州岡崎	同	升屋重兵衛	濃州大垣	陶安慶	助
同	同	阪田長五郎	同	半野利兵衛	助
同	同	角竹市	造同	文字屋藤兵衛	助
同	同	伊藤文	吉同	上井忠	藏
同	同	安藤新三郎	同	加藤庄兵衛	助
同	同	松原惣	平同	佐藤次郎	九
同	同	高須屋又	八	丁子屋平	作
同	同	梅芳園攝之助	同	福田半九郎	助
同	同	人黒屋三十郎	同	伊豫屋長治郎	助
同	同	杉浦善七	同	山岸弥右衛門	助
同	同	伊藤重兵衛	同	山中屋與三郎	助
同	同	田中傳兵衛	同	水谷善七	助
同	同	深見藤吉	同	鈴木健次郎	助
同	同	鈴木章右衛門	上有知	水谷宇兵衛	助
同	同	萬屋英吉	同		

東京日本橋通一丁目	同	北畠茂兵衛	京都御幸門通姉小路	藤井孫兵衛	助
同	同	稻田佐兵衛	同	福井源治郎	助
同	同	小林新兵衛	同	人谷仁兵衛	助
同	同	村上勘兵衛	出店	辻本仁兵衛	助
同	同	山中市兵衛	同	出雲寺文次郎	助
同	同	牧野吉兵衛	同	福井孝助	助
同	同	佐久間嘉七	同	神先宗八	助
同	同	林萬次郎	同	田中治兵衛	助
同	同	太田金右衛門	大坂心齋橋通安土町	石田和助	助
同	同	北澤伊八	同	柳原喜兵衛	助
同	同	江島喜兵衛	同	前川善兵衛	助
同	同	鈴木喜右衛門	同	中川勘助	助
同	同	木村源兵衛	同	田中太右衛門	助
同	同	水野慶次郎	同	松村九兵衛	助
同	同	東生亀二郎	同	大野木市兵衛	助

名古屋本町通八丁目 片野東四郎

